

「穴あけ」構文(*a hole construction*)への用法基盤的アプローチ

はじめに

英語には、He kicked a hole in the wall.のように目的語に hole を取ることで「穴をあける」ことを意味する表現が多数存在する。以下、これらを「穴あけ」構文(*a hole construction*)とよぶ。

この構文に用いられる動詞は、何かに対する働きかけを意味する他動詞であると想定されおり、(1)のような例は容認されないとされていた(影山 1996)。しかし、米語の大規模コーパスである Corpus of Contemporary American English (COCA) を調べてみると、ごく少数ではあるが(2)のように自動詞を用いた例も存在することがわかる。

- (1) *The elephant danced a hole in the wall. (影山 1996: 280)
- (2) a. ... a real pretty gal named Sally Sugartree, who could dance a hole through a double oak floor.
- b. ...you're going to walk holes in the soles of your shoes! (COCA)

本稿では、穴あけ構文は中心的事例から周辺的事例までを含むカテゴリーを形成しており、そのカテゴリーは自動詞を用いた事例にまで拡張している段階にあると考える。分析には、Langacker (2000)の用法基盤モデルの考えを採用する。

2 種類の穴あけ構文

穴あけ構文のカテゴリーを調べるにあたって、この構文を Washio (1997)の結果構文の分析を参考にして 2 種類に分けることを提案する。つまり動詞の意味から「穴をあける」ことを予測できる弱い穴あけ構文 (He bored a hole in the plank.) と、動詞の意味から「穴をあける」ことを予測できない強い穴あけ構文 (The moths ate holes in curtains.) である。弱い穴あけ構文を構成する動詞は dig、drill、punch などがある。¹ フランス語や日本語には、強い穴あけ構文が存在しないことから、この分類が穴あけ構文のカテゴリーにとって重要であることが示唆される。²

コーパスによる調査

次に、COCA を利用して、「動詞+a+hole」および「動詞+holes」という語順になってい

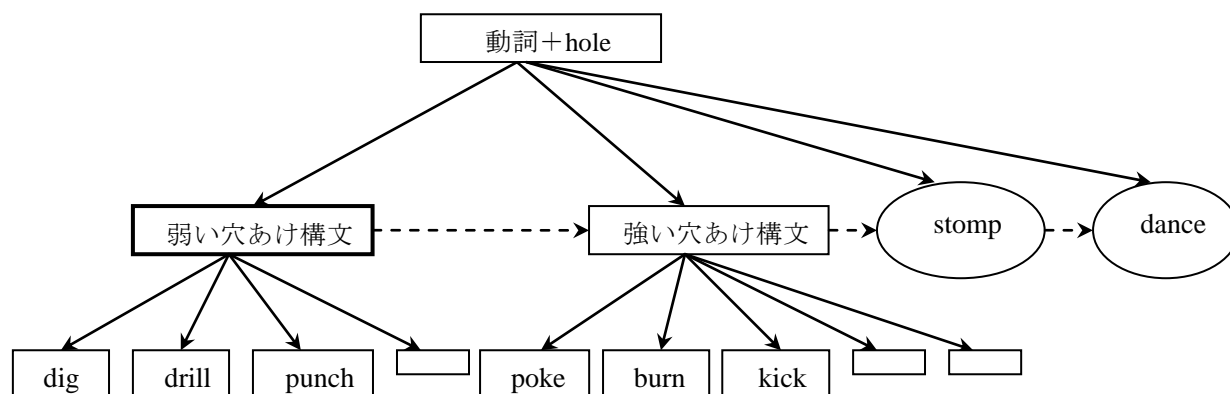
¹ 弱い穴あけ構文を構成する動詞の判定は、Longman Dictionary of Contemporary English (LDCE) の定義に make a hole という記述があるかどうかを基準とする。

² 興味深いことに、Washio (1997)のいう強い結果構文をもつ言語 (英語・ドイツ語) と弱い結果構文をもつ言語 (フランス語・日本語) という対立は、強い穴あけ構文と弱い穴あけ構文との対立においても並行してみられる。

るものを選び出す。そのうち、**make** などの作成動詞を含むものと「穴をあける」ことを意味しないものを取り除いていくと、全部で 1999 件の穴あけ構文を得ることができる。これらを、弱い穴あけ構文、強い穴あけ構文に分類していくと、前者が 14 種類の動詞で 934 件、後者が 74 種類の動詞で 1065 件であり、弱い穴あけ構文のほうが現れる動詞の種類が少ないにもかかわらず、全体の 46.8%を占めていることがわかる。

考察

この調査結果は、用法基盤モデルを用いると次のように説明することができる。まず、**dig**、**drill** などの例から「穴をあけることを意味する他動詞+hole」という弱い穴あけ構文のスキーマが抽出される。これらの例の頻度が高いことから、このスキーマは定着度も高く、穴あけ構文のプロトタイプだと考えられる。次に、**poke**、**burn** などの例から「他動詞+hole」という強い穴あけ構文のスキーマが抽出される。このスキーマは弱い穴あけ構文に現れる動詞から穴をあけるという含意が欠けているため、弱い穴あけ構文からの拡張であるといえる。強い穴あけ構文はさらに働きかけのあまり感じられない **stomp** のような例にまで拡張し、最終的には **dance**、**walk** という本来働きかけを含意しない自動詞にまで拡張される。これらの過程で「動詞+hole」というスーパースキーマが抽出され、これが(2)のような事例が成立することを動機づけているのだろう。



結論

本論では、穴あけ構文は中心的事例から周辺の用例までを含むカテゴリーを形成しており、そのカテゴリーが拡張していることで自動詞を用いた例も穴あけ構文の一部として位置づけられることをみてきた。今後は、なぜ英語において強い穴あけ構文が存在するのか、結果構文など他の構文との関係はどうなっているのかについて追求したい。

参考文献

影山太郎. 1996. 『動詞意味論: 言語と認知の接点』 東京: くろしお出版.

Langacker, Ronald W. 2000. A dynamic usage-based model. In Michael Barlow and Suzanne Kemmer (eds.), *Usage Based Models of Language*, 1-63. Stanford: CSLI Publications.

Levin, Beth and Tova. R. Rapoport. 1988. Lexical subordination. *CLS* 24, 275-289.

Washio, Ryuichi. 1997. Resultatives, compositionality, and language variation. *Journal of East Asian Linguistics* 6, 1-49.

Longman Dictionary of Contemporary English, 3rd edition. 1995. Essex: Longman.

Corpus of Contemporary American English. <http://www.americancorpus.org/> (accessed November 2009).